

新井白石と斬新な視野の拡大

— 付 雨森芳洲 —

(1)

岩 崎 允 胤

「まえがき」

本稿は、①に示すように、より大きな論稿の一環として、その「四」の部分になる（本稿中の所々に先行箇所
に言及ないし関連する文章が出るのはそのためである、諒とされたい）。

① 幕藩体制前期における儒学思想の展開

一 幕藩体制と儒学（その概観）

二 日本朱子学の成立とその思想的展開

1 藤原惺窩

2 林羅山

3 貝原益軒

（陽明学その他については、紙幅の都合上論及するにとどめる）

三 古学思想の成立と展開

1 伊藤仁斎

2 荻生徂徠（含、白石引退後の幕内での活動）

四 新井白石と斬新な視野の拡大

— 付 雨森芳洲 —

② 本稿の目次は次のとおりである。

I 白石の生涯

II 学問の特徴

III 海外への視野の拡大

——『西洋紀聞』『采覧異言』について(本号はここまで掲載)

IV 日本史への新たな展望(以下、次号)

1 日本史研究の方法論

——『古史通』『古史通或問』について

2 『読史余論』

——いわゆる九変五変説、その他について

付 雨森芳洲

引用文中、へ、く内は白石自身のもの、()内はわたくしが簡単な注記として付記したものである。

I 白石の生涯⁽¹⁾

白石(一六五七—一七二五年、名は君美)は、明暦の大火の翌月、父の出仕する譜代の小大名、土屋利直の飯屋敷(江戸の神田)で生まれた。家系には不明なところがあるが、かれは、上野の新田氏の末裔^{まつえい}という意識をもちつづけたといわれる。祖父は関ヶ原の戦で西軍についたため浪々の身となり、父正濟^{まさなり}は三一才でようやく利直の家臣となることができた。父は古武士の風格をそなえた謹厳剛直な人物で、そのもとでかれは剣の修行にも励んだ。後年白石は『折たく柴の記』で父の凜として気骨のある面影を描いている。母は古典的教養の豊かな才女で、勅撰集や源氏・伊勢などの物語の雰囲気^{はく}でかれを育んだ。利直は白石を幼い頃から「火の兒」と呼んで愛^{いと}しみ、その傍らから離さなかつたという。

一七才のとき中江藤樹の『翁問答』を読み、人間一生の道は何かを鋭く説くその真儒への教えに深い感銘を

受け、堯舜の治を慕い経世の大志を抱いて儒学を生涯の学問とすることに決した。しかし、主君土屋家には利直の没後相続をめぐる内紛がおこり、その渦中で父子ともに追放の憂き目に遭い、しばらく貧窮の生活を余儀なくされたが、土屋家は改易となり、白石は、天知二年（一六八二年）二六才のとき、大老堀田正俊に出仕することができた（正俊はその二年後に刺殺されたが、かれは堀田家には九年間出仕した）。

* 『翁問答』のなかで藤樹は、正真の学問とはどのような学問であるかという問いにたいして次のように答えている。
 「まづ明徳をあきらかにする〔大学に「明・明徳」の句がある〕^②をこころざしの根本とたてさだめ、四書五経の心を師とし、応事接物の境界〔事に応じ物に接する実際の生活環境〕を砺石となして明徳の宝珠をみがき、五等の孝行〔孝経〕にいう天下・諸侯・卿大夫・士・庶人の五つの等級それぞれの孝行〕、五倫〔君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の間柄〕のみちの至善をよくおこなひ、太和を保合して利貞なれば〔易にいう、天道のめぐりにしたがってすべてが大きな調和を保って和合し、宜しく正しきをうれば〕^③、時に逢て〔主君に〕もちいらるゝときは、四海をたゞし天下をおさめ、伊尹〔殷の湯王の賢臣〕、太公〔周の文王の師大公望〕の事業をなし、時にはあはずして窮する時はひとりその身をよくし、性を尽し命にいたりて〔本性を明らかにしつくして天命に到達し〕、孔孟の教化をなす〔その教えをふみおこなう〕。かくのごとくまなぶを正真のがくものと云なり。」

同年初、白石は、朱子学者木下順庵の門下生である対馬出身の西山健甫（阿比留）の紹介で来日中の朝鮮使節団の製述官成琬に会い、すでに上方で詩才に注目されていたかれは、自分の詩集（『陶情詩集』）の序文を書いてもらった。白石は朝鮮への関心からつとに健甫との面識を得ていたであろうし、また朝鮮信使来日の際この機をとらえ、筆談と詩の唱和とをとおして国際的な交流に参加したのである。

* 宮崎道生は当時における江戸の異国趣味についてこう書いている。「元禄時代（ここではやや広義に解して延宝・天和・貞享の頃をも含めよう……筆者）は南蛮紅毛趣味の盛行したことに加えて、白石自身江戸に生れて江戸に育ったこともあり、オランダ商館長らの参府、朝鮮・琉球使節の江戸参礼など、その行列の珍奇・壮麗、とくに朝鮮使節の場合

は四〇〇人内外という大規模なものだったから、それらが白石をも含めて物見高い江戸市民の好奇心をそそったことは言うまでもない。「鎖国」の世ではあるが、こうした雰囲気のなかで、とくに白石が、海外の国々とその文化への関心・視野を、他の市民とは比較にならないほどはるかに鮮明に、意欲的に拡大していったことは、想像にかたくない。かれは、その生きいきとした活眼にふさわしいだけの明晰な頭脳と決断の力とをそなえていた。そしてかれは、やがて恵まれた条件をうることができ、歴史のなかに没することのできない業績をのこすのである。

一六八六年（貞享三年）、白石は、西山健甫を介して、その頃すでに出府して幕儒となり、徳望と学識で令名天下に聞こえていた順庵の門（木門）に入った。ときに順庵六六才、白石三〇才であった（かれはそれまでほとんど独学をしてきたのであり、しかも自由に書物を買うにはあまりにも貧しく、河村瑞軒や妻の実家の蔵書の恩恵を受けたりなどして研究に励んでいたのである）。順庵は、日本の儒学のなかで惺窩・尺五からかれ自身へとつづく京学派の正統的位置にあり、やがて京洛から江府に出て、幕儒となり、塾を張り、その学問的声望は、大学頭信篤（鳳岡）を中心とする林家を凌ぐものでさえあった。木門からは、新井白石、室鳩巢、榊原篁洲、雨森芳洲、祇園南海、松浦霞沼、三宅観瀾ら多士済々の士が次ぎつぎと輩出しており、かれら若き俊秀らの友情と切磋琢磨が、やがて一つの時代を画する日本儒学の昂揚をもたらすのである。この門のなかで白石は、順庵の、経学を中核とする学問の広さ、そして寛容の精神を、また史学の面では実証を大切にし合理を重んずる姿勢を学びとった。——井上哲次郎がその著『日本朱子学派之哲学』中の「木下順庵」の節の冒頭を「惺窩の系統を継ぎ、教育家として異彩を放つもの、之を木下順庵となす」と端的に書き起こしているのも、まさに宜なるかなである。

白石が師の推挙によって將軍綱吉の甥、甲府藩主徳川綱豊に出仕し侍講をつとめることになったのは、一六九三年（元禄六年）、二七才のときである。この時期に白石は、内命を受けて、徳川の治世草創期以来の諸大

名家の事暦を編修した藩翰譜をつくっている（のちにさらに加筆した）。そして綱吉が綱吉の世継ぎとして江戸城西の丸に入って家宣と改名したのが、一七〇五年。綱吉の没後、將軍職を襲ったのが、一七〇九年（宝永六年）である。

当時の国内の状況を顧れば、一七世紀後半以来の農業技術の進歩による生産力の向上、年貢負担率の低減、東廻り西廻り海上航路の開拓（河村瑞軒による）、商賈経済の著しい発展、上方商業資本の成熟などを背景にして、さきにも触れた南蛮紅毛趣味が室町時代から日本に伝統的な中国趣味と並んで流行し、華美豪華の風が巷間に漲り（たとえばついに關所（全財産没収）の処分を受けた淀屋辰五郎のごとき豪商がいる）、その風はさらに農村にまで及んでいた。そして、貿易による金銀の海外流出、金銀鑄貨の改悪（荻原重秀の政策）、それによる物価高騰、貨幣への不信、買い漁りなどによる混乱と貧富格差の増大があり、上方商人の富裕化と武士や庶民の生活の窮乏化が進行した。あまつさえ、再度の関東大地震をはじめとする各地の大地震、江戸や京都の大火、あるいは富士山噴火、大風雨、洪水の勃発など天変地異があいつぎ、国土・都市の荒廃、生活基盤の破壊がすすんだ。こうして、幕府・諸大名の財政はいちじるしく緊迫し、武断に代わる文治の世の表面的な繁栄謳歌、そしてあいもかわらぬ綱吉の奢侈・浪費とは裏腹に、江戸の諸矛盾の激化による民衆の生活の困難はいやまし、「生類憐みの令」をはじめとする無定見で無謀な幕政にたいする不満の声が大きくなった。そして時代の警鐘を鳴らすが如く、江戸城殿中の刃傷と赤穂浪士の討入があり、幕府の死刑処分にたいする民衆の憤激が高まった。——白石が甲府藩に出仕したその年（元禄六年）は、かの遊里の絢爛と虚飾、商業資本の成功と失敗、「成上り」とその没落のさまをリアルに描いた井原西鶴の没年にあたり、また、近松が「曾根崎心中」をひっさげて文楽の世界に世話浄瑠璃を創造したのは、それから十年ほどたった一七〇三年（元禄一六年）である。紅灯の煙る追間におしひしがれて、結びえぬ恋のしばしの夢を死への旅路に結ぶ悲痛のなかに、民衆

はたまゆらの虚構の慰みを見いだすのであった。

白石が長年侍講を勤めてきた藩主が將軍となったいま、その側近にあってかれがめざしたものは、理想をいえば、かつて十代の頃に深い感銘を受けた『翁問答』の精神と、近くは師順庵の直々の教えとにしたがって、家宣が古えの聖人の政治、すなわち仁政をめざすのをできるかぎり扶翼することであつたらう。とはいへ、大局的にみたととき、新たな正徳の文治がここに始まるとはいへ、封建的武家の政治の立場をかれは離れることができず、実際には、綱吉治政のあとを引きつがざるをえない。しかも、幕閣内部には、大奥の喧しい口の端と醜い愚かな陰謀も巻きこんで、政争がどろどろと渦を巻いている。仁政の理念は、これを実現するのは難事に近い。

しかも、側用人間部詮房の支持をえて白石の参与のもとにすすめられたこの「正徳の治」は、長くはつづかなかつた。家宣は將軍職について三年四ヶ月ほどで早くも世を去り、その子、後継ぎの年少の七代家継もわずから三年で早世し、七代吉宗が紀伊から移って襲職するに及んで、白石らは政争のなかで退任をよぎなくされたからである。すでに元禄の頃から幕政は深刻な諸矛盾をかかえており、そもそも僅々六年余りでどれほどの是正がなされうるだろうか。それに、近世の経済・政治の諸問題は、儒学の仁政の理念だけでは片付きえぬ具体的な案件にみちみちていた。それだけに白石の政治的な見識と具体的な手腕が問われてもいた。いまここで正徳の治に詳しくたちいるのは本稿の課題をこえるが、宮崎道生は次のように書いている。『文治』の理念を抱いた家宣によって、將軍就任直後から実施された社会的生活・経済生活安定のための政策は、『生類憐みの令』を手はじめに、粗悪な十大銭（一枚で十文に相当させる粗悪な大銭で、宝永通宝ともいわれる）の廃止、箔および酒の運上（雑税の一種）の廃止、大赦令（生類憐みの令による「罪人」など約九千人の大赦）の発布であり、金銀貨改良事業への着手（荻原重秀による悪貨政策の是正）、長崎貧窮市民の救済、公正迅速な裁判の実

行だった。」家宣はこのようにしてまず綱吉末期の悪政を改正することに努力した。白石は、綱吉の没して翌日登城の時から次々と意見書を差し出すことなどを通じて当初から輔佐の実をあげたのである。

白石の関与した重要な施策としてその他あぐべきものは、国内的には、元和・寛永・天和の武家諸法度の改定、すなわち武断に代わる新しい「文治」の理念をとくに礼楽の見地から明示するいわゆる「宝永令」の制定である。また、対外的には、日朝両国間に交わす国書の書式の改定と朝鮮信使の接待方法の簡素化の問題である。これらの対外問題のうち、前者は、国書にするす徳川將軍の呼称を従来の「日本国大君」から「日本国王」に変更するという提案である。この提案については、日朝国交の仲介に当たる対馬藩の儒者雨森芳洲あまのもりほうしゅうとの内部的な論争をひきおこすなど、かなりの難問であった。しかし、折衝の末、これらの問題はそれぞれ落着おちつきした。さらに外交的に、わが国の経済政策上はなほ重要であったのは、いわゆる「海船互市新例」が定められたことである。これは、海外貿易による金銀のおびただしい流出を防ぐため、外国船（清とオランダ）の来航数と金銀の額とを制限すること、密貿易を嚴重に取締ることなどを、主たる内容とするものであった。

また、白石が力を入れて事に当たり、やがてかれの海外（とくにヨーロッパ）への視野の飛躍的な拡大を可能としたのは、シシリー島生まれのイタリア人宣教師シドッチ（Giovanni Battista Sidotti）との奇しき出会いであった。ときに一七〇九年（宝永六年）、家宣が將軍となって間もなくのこと、白石五三才のときであった。白石とシドッチとの間に人間的信頼と学問的尊敬の念が生まれ、この奇遇をとおして、白石は、世界の地理についての新しく広い知見を基礎として政治・経済の状況、キリスト教をめぐる諸事情、さらに、科学・技術、習俗、文化、言語等々、多くの新鮮な知識を獲得することができた。

周知のように、当時日蘭貿易が盛んにおこなわれており、白石にとって外交上オランダについて可能なかぎりの十分な知識をえておくことがたいへん必要であり、そのためにも、カトリック・イエズス会士シドッ

チからすでに一応得ていた、このプロテスタントの国、オランダについての情報を、より正確なものにしたいとの思いもかねがねあり、かれは、一七二二年(正徳二年)から四回、オランダ商館長ほかオランダ人との会談をおこなった。このようにして、白石は、オランダ語を読むことはできなかったけれども、旺盛な知識欲とひと倍の努力とによって、その西洋知識は当時の日本人として(いや東洋人として)抜群のものとなった。他方、かれの『本朝宝貨通用事略』(金銀の海外流出を防止するために貿易の制限を策する白石の見解を述べたもの)はオランダに渡り、仏訳され、シーボルトらものにちにそれを読んで役立てたといわれる。また白石の『西洋紀聞』も翻訳されており、かれの名は西洋にも知られるようになった。大槻玄沢も白石を蘭学の草創者と讃えている。

家継の没後、白石は間部詮房らとともに幕内の反対勢力によって罷免された。吉宗はさすがに一定の雅量をかれに示し旗本の身分と禄はそのまま認めたし、久世重之のようにかれの知己は皆無ではなかったけれども、屋敷を明け渡さねばならなかったばかりでなく、在任中の建議類の焼却さえも企てられたし、胸中には、小さくはない失意とともに、寂々たるの思いがなかったとはいえない。しかし、そうした思いに屈していたずらに鬱々の日を送る白石ではなかった。小石川同心町の寓居、ついでそこが類焼の厄に遭ったのちは、青麦せいばく芒々たる内藤新宿の、訪れるひと稀な新宅に移り、こうして閑暇の時を得て、この一代の碩学の学的蘊蓄がいまや堰を切ったように奔り出て、一連の労作が次々と完成されてゆくのである。今日失われている畢世の作『史疑』がものされ、『折たく柴の記』や『東雅』も成る。また、『読史余論』、『古史通』、『古史通或問』、『西洋紀聞』、『采覧異言』などが定稿化される。『南島(琉球)志』、『蝦夷志』(あわせて『南北倭志』といわれる)もものされた。

* 間部詮房にたいしても、吉宗はその家宣への忠誠を認め、大名としての身分はもとのままとした。

白石は六〇代の半ば頃から相前後して、仙台の藩医で画家、すぐれた文化人である佐久間洞巖(太白山人)、および前期水戸学の代表的儒者安積澹泊の兩人と、書簡を通じての温い交情を重ねるようになり、これは孤居に住む晩年の白石の生活に人間的な潤いを与え、精神的慰藉ともなったようである。澹泊は彰考館総裁として光圀の『大日本史』編修を助けた学者であり、藤田幽谷が『修史始末』に描いているように、心情豊かでしかも凜とした気風をもつ傑士である。かつて藤原惺窩は、洛北の人煙まれな山里で陶淵明の境涯に遥かに想いを馳せて晩年を送ったが、いま白石も、洞巖や澹泊と交わす書簡のなかで淵明の「帰去来辞」その他の名詩文をときおり想起している。ここでわたくしは、宮崎道生の著作にいま一度恩恵を蒙って、一文を引用しておきたい。「自然環境上の違いを別として、心境においては白石のそれは陶淵明に著しく似るものがあるように思われる。享保九年(一七二四年)七月四日付の洞巖宛書簡において、淵明の『五柳先生伝』を取り上げていることが、それを推測させるのである。その伝の初めに『閑静にして言ふこと少なく、榮利を慕はず』とあり、終りに『常に文章を著(あ)して自ら娛(たの)んで頗る己が志を示し、得失を懐(おも)ふことを忘る』と見えるのは、最晩年の白石の姿にそっくり当てはまる感じがするからである」……。

II 学問の特徴

白石の学問の内容に入るに先立って、その全体としての特徴を、前述した益軒の学問(本稿の「まえがき」第一行目を参照されたい)と比較しながら、予備的にいささか考えておこう。

① アンシクロペディストであること

益軒の学問・思想の領域はかなり広く、かれもアンシクロペディックであったといえようが、白石の場合にはさらにいっそうそういうことができるだろう。桑原武夫も「新井白石は、十七世紀から十八世紀にかけて日

本がもちえたもつとも偉大な百科全書的文化人である」といっている。そして当時の世界の代表的な百科全書的文化人、たとえばヴォルテール、フランクリン、ライプニッツ、ロモノソフ、顧炎武らと比肩しうる人物であるとしている。さらに、徳川日本のおかれていた条件の不利にもかかわらず、視野の広さと思考の獨創性をもつ先駆者であったとも述べている⁹⁾。たしかに、益軒も博識多才であったが、白石は、何としても、世界、その五大州、とくにヨーロッパ諸国の地理、風俗、物産、交通、政治、軍事、宗教、言語などについての当時として広汎な記録、近隣では、中国はもちろん、朝鮮、さらに琉球、蝦夷についての視野、また日本史にたいする総合的で科学的な考察視点の確立、日本語の研究、幕閣における自国の政治・経済の諸問題への直接の関与などにおいて抜群であり、しかも詩人としても当代屈指の一人であったということが出来る。

白石の益軒との相違は、まず、益軒が筑前の藩儒としてその地を生活と活動の基盤としたのにたいし、白石は、江府をほぼ生活の基盤とし、ときの大老堀田正俊、ついで、徳川綱豊、すなわち將軍家宣に出仕することによって、幕閣の中枢に身を置き幕政に積極的に参与することができ、しかもその条件を最もよく利用して、関心のますます広がるがままに実践と結びつけて学問的研鑽を怠らなかつたことにみられるだろう。シドッチとの奇遇をえたのも幕内でのその地位のゆえにであるが、対談をおこなうに先立って、白石は幕府の書庫から関連する文献を自由に借り出すことができるなど、願ってもない条件をうることができた。白石は、頭脳明晰な俊才であったばかりでなく、博学、そしてたえざる努力の人でもあった。

さらに、同じくアンシクロペディックであるといっても、白石の益軒とちがう特徴は、一つには益軒がナチュラルリストであり、植物の栽培や採集などをし、実験・観察をおこなっているのにたいし、白石はそういうことはしていない。ひたすら社会・文化に眼を向けている。また一つには、晩年の仕事を示すように、益軒は武士や民衆に語りかけるために教訓書、つまり道徳的著作を書くことに大いに力を注いだのにたいし、白石の場合

は、教訓を直接の目的とした著作をものしてはいない。たしかに『折たく柴の記』は訓話的な面をもつけれども、それは自分の後裔にのこすあくまで私的な家訓としてであったといえよう。しかもそれは一廉の男子がいかに経世のためにふるまうべきかについてであって、日常生活における道徳的な説き勤め、訓戒を旨としたものではなかったといえる。また『藩翰譜』は、家宣がまだ甲府の藩邸にいた時期に、白石がその命をうけて編修したもので、そこには、諸国・諸藩における名君賢相や暗君愚将の言行もしるされていて、主君やその側近の者への鑑戒という道徳的内容も織りこまれていたが、この著作の基本的意義は、徳川幕府確立期における諸侯の事暦の記述をとおして徳川氏にたいするその従属的な関係を明らかにするところにあるといえることができる。⁽¹⁰⁾

② 実学的であること

白石は、堯舜の治世を理想とし、聖人の道の実現を主君に期待し、誠心その輔佐に努めた。かれは経書に通じ、主君にのべ千三百日に垂んとする進講を重ねたといわれるが、そのさい聖人の道をたんに学問的に講ずることにとどまらなかった。かれはまた朱子学の形而上学的な理・気二元論を抽象的に論議するようなことはなかった。白石においても儒学は一貫して実学的なものであった。かれにとって学問は現実の場に生きいきと適用されてこそ真正の学問の名に値するものであった(もちろんここで「実学」というのは、今日の実務・ビジネス、たんに「応用」の学といった意味のものではない)。

ところで、同じく実学的といっても、白石と益軒の場合とはかなり異なっている。たとえば、益軒は藩儒であり、一六八二年(天和二年)の朝鮮信使来日のさいには、釜山から下関までの渡航の寄港地としての藍島^{あいの}に出向いて使節団歓迎の役を果たしたが、信使にたいして白石のように外交的な提案をし直接の折衝をお

こなうという位置にはいなかった。たしかにかれも、筑前藩主の継嗣問題のさいに一役を買ったり、藩の財政をめぐる問題に献策したり、凶年には知行地の農民を救済したこともあるが、総じてみた場合、白石のように、あとうかぎり聖人の道の実現を願ひ経世済民のために政治に積極的に参画するようなことはなかったといえよう。かれの実学は、晩年力を注いだ著作が示すように、主として、所与の社会秩序のなかで武士や庶民が日々の道徳的な（しかも楽しむことを知る）生活をうちたてること、および本草学の実験観察をおしてこの学の研究をおしすすめることなどにおかれていたといえよう。白石はこれにたいし、幕政の中枢部にあつて全国的な規模の諸問題にたいし、積極的に立案・建策をおこない、在任の期間こそ短かかったとはいえ、後世「正徳の治」とよばれる治政の実を、將軍の輔佐をおして少しでも実現することに鋭意努力を重ねたのであった。ここにかれのみずから体する実学としての儒学の本領があつた。

③ 実証的であり、合理的であること

益軒がつねに疑う精神をもつことの大切な所以を力説していた点については前述したとおりであるが、白石もまたいやしくも学問をする以上疑うことは欠かせないことと考えていた。そして、証拠がなく疑わしいことについてはあくまで疑わしいままとしておかねばならない、根拠なしに恣意的な解釈を加えて、勝手なことをいってはいけない、また、知ったかぶりをしてはいけない、とし、このことをかれは師の順庵から学んだ、といっている。『人名考』のなかでかれは次のように書いている。「先師常に某（それがし）を戒めて、証なく拠なく疑しき事は、かりそめにも口に出すべからず。孔子の大聖すら、猶述（なほのべて）而不作（つくらず）と宣（のたま）ひし。只、古人の言を述ぶべし、自の意見を以て言を造る〔根なし言（こと）をいう〕べからず。是、先王の時に刑し〔定め〕たまふ所也、と申しき。』¹¹この言葉のなかからは、白石ら往時の多くの俊秀が集うた木門の学問的な雰囲気がかがうことができる。

白石は、世人が天皇家の血統をうちたてようなどと殊勝なことを思いたって、神武より以前のことを、やれ神代だ、神代だと、さも自分が見てきたかのようにいいふらしているのを、佐久間洞巖宛の書簡で批判して、次のような趣旨のことを述べている。皇統を立てようなどとして、それ以前の歴史的な事実を消してしまい、神代だ、神代だといってその頃のことを紛らわしいこととしてしまったように思える。神社などの類も、その由来の知られぬことがいくらかでもあるのに、そのままにしておかず、かえって、さも現に見てきた事であるかのように断定的なことをいうのは、君子としてなすべきことではなく、「疑は疑を伝ふる」(疑わしいことは疑わしいこととしてそのまま伝えること)とする聖人の言に大きくそむくことになる。自分としてはつねに「ただただ少(し)も拠のたしかに候事を以てきはめ(追究し)たきもの」と思っている、と白石はいう。かれのこの見解は、実証を重んずるということであり、合理的・科学的な態度であるということができる。

白石の考え方が合理的であることは、かれの『鬼神論』にも現れている。たとえばかれは次のようにいう、「子^{ほうふり}子の蚊となるが如きは、人常に見る所なれば、うたがふ人、百に一人もなし、たゞ人の信ずる所は目のみ。目の及ざる処は疑をまぬかれず。ましてや彼人化して物となるの類は、もとより常の理にあらねば、人の疑ふ所むべならずや。是夫子「孔子」の怪を語り給はざるは、其の常の理にあらざるが為か」(傍点筆者、一六八ページ)。「縦^{たとひ}いかなる神明にてましますとも、狐蛇のかたちとなり給ひなんは、是則^{すなはち}(もともと)狐蛇にこそ有るべけれ。」そんな狐や蛇を祭るとはいったい何か。「何の尊き事か有べき。」たわけたことではないか。「ましてもとより妖狐毒蛇の人をまどはし人をそこなはんを、いつ(齋)き祭る理^{ことわり}や有べき。是等の祠^{ほくら}をいにしへは、淫祠^{いんし}ともいひて、尤^{もつと}(いかに)も」国の禁にてぞ有ける」(一七三―四ページ)。白石の合理的な思考はそれゆえ、はっきりしている。とはいえ、不思議といえ不思議なことに、この『鬼神論』のなかで、かれはわざわざじつに多くの怪異妖怪の例をあげている。博覧強記のなす戯れともいえるかもしれないが、他面、何でこ

れほど文献から集めてくることに興味があるのかと思いたくありません。それゆえ、山片蟠桃(『尊の代』)にはかえてこれは御当人の不徹底なためであろうとみえてくるとしても、無理とはいえないのかもしれない。

白石の思考の合理性は、かれが政治経済上の現実問題の処理のために今日の言葉でいえば統計数字を用いていることにもみられる。金銀貨幣の改鑄や長崎貿易における金銀流出の規制を考えるさいに、かれは検討の基礎としてそれらについてのそれまでの具体的な数字を調べている。当時まだ統計利用の観念のなかった頃のことであり、そもそも記録にとどめられかれが利用しえた当時の数字の確かさ(すなわち、所与の数字が社会現象の量をどのように、またどれだけ正しく反映しているか)については欠陥が多ったとはいえず、数量をあげて問題を検討する必要を考えていたことは、かれの思考の先進性を示すものといえよう。

④ 人間性尊重(ヒューマニズム)の視点にたっていること

この点について少し詳しく述べることにしたい。

もし儒学をもっぱらこちこちの封建的道德説としてのみとらえ、この観点から、羅山による、君臣・上下・人間の尊卑乱すべからずとする区別と、仁・義・礼・智・信という「万代不易」の道とについての説教を思い出し、あわせて「教育勅語」における「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ」云々や、また「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ」云々という頭ごなしの徳目の押し付けをも念頭に浮べるならば、儒学はあまりにも時代遅れで、人間的(ヒューマン)な普遍思想とはとても結びつきえないものであるかのようにみえてしまう。もしそうとすれば、儒学思想がかなりの程度に民衆のあいだにもしだいに滲透するようになっていった江戸時代には、そのかぎりでは、かれら民衆のあいだに人間として相互に通じあう普遍的な側面が欠けていたとみることもなりかねない。しかし、儒学のうちにも、上述したように、実証的・合理的な側面があった

ように、人間性尊重の思想が重要な側面として含まれていたように思えるのである。わたくしは、そのことを、すでに順庵、仁斎、益軒らの思想においてみてきた。しかし、このようなことはむしろ当然のことであるといえよう。なぜなら、民衆が生活のなかで相互に通わせている人間的なもの、当時の社会体制の制約のもとでも、いいかえれば、社会構成的な特性を担いながらも、民衆が実生活のなかで示している或る普遍的に人間的なもの（ヒューマニスティックな内実）を、時代を代表する思想家たちが表出してはいないはずはないからである。

儒学は、中国の春秋時代におけるそもそもの誕生以来さまざまな歴史的な変遷と地域的な伝播を介しながらも、それぞれの時代・地域の特殊な制約と不可分なかたちで普遍的に人間的な内容を——時期・地域の諸条件によって強弱さまざまな差はあるにせよ——何らか表出していたといえるのではなからうか。たとえば、まづもって『論語』はその冒頭で「友あり遠方より来る、また楽しからずや」（「学而」篇）とうたい、弟子の樊遲はんちが「仁」を問うたとき、孔子は「人を愛す」と端的に答えている（「顔淵」篇、その愛は、兼愛の立場に立つ墨子から偏愛として批判されるにせよ）、孔子はまた、「仁をなすは己による、人に由らんや」といい、弟子子夏の言だが、「君子は敬して失うなく、人とともに恭うやうやしくして礼あらば、四海のうちみな兄弟なり」（「顔淵」篇、四海同胞であるという思想を示す）といい、曾子は「天子の道は忠恕のみ」（「里仁」篇、いうまでもなく、ここで忠とは、臣として君に忠などといった意味ではなく、自分の心に誠であること、偽りのないこと、恕とは、他人のことを自分の心と身からおしはかること）といっている。このような思想にたいしわれわれは今日基本的に異論があるろうか（たとえ詳しくみれば、それぞれの言葉の内容に、一定の時代的制約を伴うのはいうまでもないにしても、である）。——まづもって、このような思想が『論語』のうちにあればこそ、往時われわれの先人は儒学の教えをひとの世に処する行為の拠りどころとしてきたのではなからうか。

* どんな時代にも、ひとは、所与の歴史的な条件のもとに現存する思想を何らか前提として自分の世界観と人生観を求める(それ以外のどんなやり方があるか)。このことを理解しなければいけない。それゆえ、かつて空海は仏教を、なかでも未知の密教の真理を求めて渡唐したのであるし、アウグスティヌスは新プラトン主義、マニ教、キリスト教のあいだを長く彷徨したうえで聖書の教を受け入れたのである。江戸期の初頭には、仏教が織豊期を経てかつての權威を喪失しており、好学の有為の青年は儒学の思想を自分らの拠りどころとして受け入れようとした。これにたいし、日本の上代の古典にたちかえる契沖らの新しい学問がやがておこるのである(まさか、当時の日本で、弾圧されたキリスト教、未知のギリシャ・ローマの思想、エラスムスやブルーノの思想を受けとる、というわけにはいくまい、日本に届いていないのだから)。

ここでわたくしは、白石のヒューマニズムが鮮明に示されているものとして、かれが裁判の場でどのような思考をおこなったかと顧みようと思う。たとえば、正徳元年七月秋元但馬守喬朝の領地でおきた事件をあげよう。川越の農民の娘がある商人のもとに嫁していた。彼女の兄が訪ねて来て商人の妻となつて居るその妹に、おまえの夫は商用で故郷に帰っているから父の所へ来て帰るのを待て、と告げて、妹を父の許に連れていった。しかし、なかなか夫は帰ってこず、不安に思っていたところ、近くの川に水死者が出ているとの話があった。彼女は、父や兄が自分の憂えを少しも取りあつてくれないので、名主に頼んだところ、水死者が自分の夫であることがわかった。役人がよく調べてみると、父が兄と二人で共謀して、その婿を絞殺して水中に沈めたことが明らかになった。この訴訟事件について白石は家宣から意見をたずねられた。問題は、妻が父の罪を暴いたという罪に問われるかどうかにあった。

評定衆は、やや類似しているともいえるがやはり異なる点のある事件についての判例をもとに、入獄一年で、身分をとりあげて婢(最下級の賤民)とすべきであるとし、大学頭林信篤は、女が、もしその父が夫を殺したことを知って告発したのであれば死刑、もし事情を知らなかったのであれば、婢とすべきだとしたようである。これにたいし、白石は、この女は名主に頼んで水死体を見せてもらってはじめて夫であることを知ったのであり、これは、父と兄が共謀して殺したことを知って告発したのとは、大いに事情を異にしている、したがって、このような女を断罪するのは、まったくその理由がない。そして、夫を失って寄る辺を失ったこの哀れな婦人のために、せめて尼寺にいられて父と夫の菩提をともなわせ、あわせて飢えや寒さの心配なく生をまっとうできるようにお願いしたい、と述べている(当時寄る辺を失った女は、身を売り、操を失うなど、この二〇世紀末の今日とはちがって、哀れで暗黒な未来が待っていることをわれわ

これは考えねばならぬ。宮崎道生はこのような仕方での事件の解決について次のように評している。「これ〔白石の意見が採用されて寡婦は重罪を負れ、鎌倉の尼寺に送られて落着を見た。判決案文の終りの部分に見える『哀々たる寡婦、すでに其(の)託する所を失う』という一語は、白石の人間的暖かさを示した感動をさそう文字である。この事件の記述は『折たく柴の記』中でも異例の長文で、白石の人間的いぶきがひしひしと感ぜられる文章であるが、この情理兼ね備わった名判決文は、裁判史上、特筆さるべきものの一つに数えられている」と。(ここで……以下)は本文である。)

この訴件についての評定にあたっては、当然にも封建社会の人倫関係にかかわるところがあり、白石の思考の過程にも、詳しくみてゆけば、妻の夫との、また父との封建的な人倫的な秩序の問題がからんでくるけれども、大局的な要点をとらえていえば、いま述べたような温い解決をみるのであり、白石は、事実を正しく見(実証性)、何が人間の理に適っているかを考え(合理性)、そこから全体としてヒューマンな解決に到達している(ヒューマニズム)のである。ここには、実証性と合理性とヒューマニズムとのみごとな結合があり、儒学思想は現実にもこのような内容をもちえたことの意義を十分に考えなければならない。

Ⅲ 海外への視野の拡大

——『西洋紀聞』『采覧異言』について

元禄時代には、この狭隘な国土に人々は閉じこめられ、かつてキリシタンの遭遇した筆舌を絶する弾圧の苦難とそのタブー化のうえに、「銀かが銀を生む世」、街々の殷盛と遊里の絢爛えんを謳う文化が花咲いた。折しも、江府の一角に白石が現われ、この一般的にはかなり内的に閉じられていた空気を鮮やかに切り拓いた。すぐれた儒者として、儒学自身のもつ実証性・合理性の側面をぐっとおしすすめ、その視野は、一気に海洋をこえて遙かに地球上の広大な世界に雄飛した。かれは、めざす目標に適確に向かう旺盛な探究心によって獲得したその

広い世界知識を、時代のいくたの制約をのりこえて組織立てていった。もちろん、かれのこの海外知識は、海船互市問題などの対外交渉にもよく生かされたであろうが、それにとどまらず、後世にのこる著作上の成果として、前記『西洋紀聞』『采覧異言』などを生みだしている。前者は、タブーとなっていたキリスト教についての大胆な内容を含んでもおり、公刊されることなく、筆写によって読まれるにとどまった(寛政年間に將軍が白石家から献上させたことがある)が、後者は、そういう問題性を孕んでおらず、江戸時代に人々が西洋についての知識をうるのに大いに役立った。「洋学抬頭の曙光はこの著によって示された」と伊豆公夫もいっている。

* ここではやや文学的にわたくしは叙述したが、当時日本に対外的な情報があるていど主として長崎から入っていたことも当然にも述べておかねばならない。山口啓二は『鎖国と開国』で次のように書いている、「外国の情報・知識という面でも、長崎は開かれた窓でした。幕府は外国船が来るたびに、かれらから情報を取りました。オランダ人からは風説書を提出させ、これを翻訳させて幕閣が閲覧しました。中国人からも同様に情報を提出させ、唐船の風説書として幕閣に提供されました。そのように公的に情報を収集していただけではなく、長崎で外国人と接触する地役人や商人たちは、交渉や商売を通じて情報を交換していました。したがって、日本にとって地球的世界からの必要な情報は、この長崎の窓口から導入されていたといつてよいでしょう」。

① 白石によるシドッチの尋問、問対

本稿でわたくしは主として『西洋紀聞』をとりあげ、『采覧異言』を補助的に利用することにする。前者は、白石によるシドッチの尋問、問対を基礎としながら、その後のオランダ人との数次の会談や、漢訳された西欧の地理書によって内容的に補強されている。それは三巻から成り、「上の巻」は、シドッチ尋問の顛末、「中の巻」は、海外諸国・諸地方の地理・文化・経済・政治・軍事など、さらに同時代の最もホットな国際的ニュー

スとしてのスペイン継承戦争などを含み、「下の巻」は、主としてキリスト教にかんしており、ザヴィエルやシドッチのこと、その教理（旧約・新約聖書の内容の概略も含めて）、さいごにかれの評言をしるしている。

尋問は、シドッチの幽閉されていた小石川のキリシタン屋敷で、一七〇九年（宝永六年）一月二二日から一二月四日まで四回おこなわれた。シドッチはローマで三年間ほど日本語を、入門書によってであろうが、勉強し、ルソン島でも在地の日本人から情報を得てきており、かれの日本語には畿内、山陰、九州、四国の方言が混りこんでいたが、慣れるにしたがって、しだいにかれの語ることは、白石がはじめ懸念していたほど、分からなくなってきたようである。ともあれ、最初、問対をはじめるに先立って、白石は周到にも大通詞今村英生をはじめ出府した三人の長崎の通事たちに、イタリヤとオランダなどは互に距っているといっても、わが長崎と陸奥にしても距っているのであり、オランダの言葉でかのシドッチの地方の言葉を推しはかれれば何か通じるところもあるう。今日は自分のためにシドッチが語ることを推しはかって伝えてもらいたい、すなわち、「某がために、其ことばを通ずべきためなれば、たとひ彼申さむ事、心得ぬ所ありとも、かたがた心にをしはかり、おもふ所を以て、某に申せ」（一一ページ）、といい、この了承のうえに問対がおこなわれたのであった。

* 『采覧異言』の「序」に白石は、取調べの二日目にオランダの鏤版万国輿地図（ようばんばんこくよちず）によってシドッチと問対したさいの様について面白いことを書いている。それによると、白石は、地図に理解できないことがあるので、通事にオランダ語（原文、和蘭語）で訊ねさせたところ、シドッチのいうところが、徐々に分かってきた。そうこうしているうちに、かれの方もだんだんとこちらの言葉に慣れてきて、ほぼ滞ることなく意味が了解できるようになり（原文、彼稍熟、我語、略無二滞礙一、神意意得）、ちょうど響が声に応じ鏡が光を照らすごとくであったと、終わりの部分などかなり漢文特有の誇張した表現だが、両人のあいだで対話を通じるようになってゆく喜びが手にとるようになる（10）。いまわたくしが丸括弧（後者）内に書いた漢文は白石自身の原文であるが、これはシドッチがだんだんと「我語」になれ

で上手になってきたことを意味していると考えたい。「我語」は白石の語る日本語であろう。

* * * ここでついでに、後年の白石のオランダ人との対談についていえば、かれは正徳二年に二回、同四年に一回、同五年に一回と、合わせて四回にわたってオランダ商館長らのオランダ人と会談し（その詳細なメモは『外国語調書』としてのこっている）、とくにオランダ、さらに西洋全般についていっそう正確な認識をえるように努力している。シドッチはイエズス会士であり、その属するカトリック教会は当時プロテスタント教会と敵対的な関係にあったから、白石が、シドッチからえた情報とは別に、オランダ人からの情報を求めたことは、知識の偏向を避けるために賢明なことであった。なお『采覧異言』が成稿となったのは、ようやく一七二五年五月（享保一〇年）である。

白石とシドッチとの間には、対談（とはいえ、形式上からいえば幕府側からの囚人の取調べであるが）をとおして相互に人間的かつ学問的な信頼感が生まれた。『西洋紀聞』の「上の巻」でも白石はシドッチについて、「凡そ、其人博聞強記にして、彼方多学の人と聞えて、天文・地理の事に至ては、企て及ぶべしとも覺えず」、礼儀正しく、心情は暖く、「また謹愨（きんけんかく）」（「つつしみ深く誠実」）にして、よく小善にも服する所ありき」（一八ページ）と書いている。白石が最も感動したのは、シドッチにたいし布教のために来日したさいの覚悟を訊ねたときのかれの応答である。すなわち白石が「男子其国命をうけて、万里の行あり。身を顧（かひのみ）ざらむ事は、いふに及ばず。されど、汝の母すでに年老いて、汝の兄も、また年すでに壮なるべからず。汝の心におめて、いかにやおもふ」と問ふに、しばらく答える事なくて、其色うれへて、身を撫（な）していふ。『初（はじめて）一国の薦挙（せんきよ）によりて、師命をうけしより、いかにもして、其命を此土（日本）に達せむ事をおもふの外、また他なく、老母・老兄も、また我此行ある事は、道のため、国のため、其幸これに過（すか）すと、悦びあへり。されど、此体（このてい）挙（あ）りて、父母・兄弟の身をわかつたずといふ所あらず。いきて此身のあらむほど、いかでかこれをわするゝ事はあるべき』といふ（五七ページ）。さらに、「老大（歳老いた）の母と兄とを棄て、万里に来る事、法（キリスト教）のため、師のため、其他あるにあらず。初、此命をうけし日より、我志を決せし所三つ。其一つは、本国望（のぞみ）請（こ）ふ所を聴（き）

されて、我法〔キリスト教〕ふたゝび此土〔日本〕に行はれんには、何の幸がこれにすぐべき。其二ツには、此土の法例〔準拠となる法令〕によられて、いかなる極刑に処せられんにも、もとより法〔キリスト教〕のため、師のため、身をかへり見る所なし。……其三ツには、すみやかに本国〔ローマ〕に押還おしかへされん事〔強制送還ということになれば〕、師命をも達し得ず、我志をもなし得ず、万里の行をむなしくして〔はるばる万里の波濤をこえて来たことが何の実りもないこととなって〕、一世の譏そしりを貽のこさむ事、何の恥辱かこれにすぐべき。されど我法はまだ東漸す〔東方日本にまで伝わる〕べからざる時の不幸にあひし事、これ又誰をか咎むべき〔六九ページ〕というシドッチの切なる述懐であった。シドッチもまた白石の非凡を認め、「敏捷びんせうにおはし候」とか、「大事業をなさずにはすまないお方」といい、また「五百年の間に一人ほど生れ出る人」と評したという。^②

② 世界諸國、諸地域の地理

——自然地理を基礎に人文地理へ

『西洋紀聞』の「中の巻」は、冒頭で、イエズス会宣教師利馬竇りまたう（マテオ・リッチ）の『万国坤輿図』（一六〇二年、北京刊、ただしここではおそらくその写本）によりながら、「大地・海水と相合て、其形円なる事球きう（ヘテマリ）のごとくにして、天円の中に居する、たとへば鷄子の黄なる、青き内にあるがごとし。其地球の周囲九万里にして、上下四旁しほう（前後左右、東西南北）、皆人ありて居すれり」（二七ページ）と述べている。白石にとって仏教の須弥山説などはすでに論外である。^①この万国坤輿（大地）図は、漢字で書かれた木版刷の当時としては良質の最初の世界図として中国人の世界知識を啓蒙するのに役立っていた。^②それは日本にも伝わっていたがあまり利用されていなかったようである。いま引用した『西洋紀聞』冒頭の箇所によって、天は円く、地もまた円い（別の箇所では「円なる事球ことのごとく」とある）と白石は書き起こし、その地球説を述べている。

かつて羅山がイルマン〔修道士〕・ハビヤンの地球説に接して驚いて反対した当時にたいし、認識はぐっと進んでいるが、天については丸い（したがって閉じられているといえよう）という見解に白石は依然としてどまっている。もっとも、シヨルダーノ・ブルーノ（十六世紀後半）のような、宇宙は無限、世界は無数という宇宙観は、そもそも当時のイエズス会士はまだとっていないのである（この思想に、やがて志筑忠雄、司馬江漢、山片蟠桃は、しだいに近づいてゆく）。

* 『西洋紀聞』からの引用中、角括弧へで述べた大部分は白石自身の注記である。以下同じ。

ところで、白石は、第二日目にジョン・ブラウのオランダ鏤板の輿地図（その原本）をシドッチに見せたところ、かれはこれは七十年前のもので、「其精妙いふべからず。今は西洋地方にも得易からざる所也」といった。白石がこのブラウの地図と比べてみると、リッチの万国坤輿図、その他、三才図絵、月令広義、天経或問等々、中国の地図は、どれも大略をしるしたものにとどまり、またブラウよりかなり劣っていることがはつきりした。中国の地図には、五つの州のほかに、南アメリカやアフリカの南に大陸が広がっているという伝えによって、墨瓦刺泥加あるいはメガラニカという一州を加え、六大州があるとするが、白石は、ブラウの地図によれば、南方一帯の地はまだ詳らかになっていないとして、六大州説を採らず、「凡ソ其地〔地球上の諸地域〕をわかつて五大州となす」（二七ページ）という説を採用している（疑わしきは採らず、というのがかれの学問的姿勢だからである）。

* オセアニア（＝大洋州）はまだ州とはみとめられていない。『西洋紀聞』にはオーストラリアはノーワ・ヲ、ランテヤ（新オランダ）という名で、アジアに入れられ、きわめて広いとされているにとどまる。

このようにして、白石は、ブラウの地図を前に置いて、世界各地の地理をシドッチに訊ね、次々と納得して

ゆくことよって海外にたいする認識を大きく拡げる。そして、今日の言葉でいえば、まず自然地理を問い、そのうえに人文地理を尋ね、断片的ではあるが、文化、言語、宗教、歴史、国際状況などの問題に及んでいる。²³ 五大州のうちでは、ヨーロッパとアジア（とくに南アジア）のことが詳しく述べられている。これは、シドッチがイタリア生まれのイエズス会士であり、また海路、南アジアを経て渡来しているという事情にもよる。『采覧異言』では、さらに必要に応じてマテオ・リッチの世界図を白石はかなり利用している。（^{*}というのは、白石はオランダ語を読まないため、自力ではブラウの記述を利用できず、部分的にマテオ・リッチの地図に付記されている漢文を資料として用いているからである）。またこの書では、『西洋紀聞』に比べ、アジアはヨーロッパよりもずっと詳しくなり、南と北のアメリカがアフリカよりも多く扱われている。しかしわたくしは本稿では、全国各地域の地理については個々には具体的には立ち入らないことにする。

* 『采覧異言』は、簡潔な「序」と「輿地総叙」のあと「目録」を付して、以下、本文は五巻から成っている。各巻は逐次、ヨーロッパ、リビア、アジア、南アメリカ、北アメリカと、五つの州ごとにあてられており、この点で、『西洋紀聞』より組織的に整理のうえ叙述されている。各巻の分量は、前述したように、かなり多い少ないがある。ここでリビアとするのは、『西洋紀聞』では、アフリカとされていた州である。次に参考のために、その「目録」を掲げておこう。これによって、どれだけの広い地域にまでかれの視野が及んでいたかが一目してわかるだろう。漢字の地名は明儒（マテオ・リッチ）の表現によっており、ルビとして付された片仮名は、白石が、通詞の協力もあるうが、西洋の固有名詞を日本語で表現したのであり、その試みには先駆的な意義がある（もっとも西欧語の仮名表示という点ではキリシタン文書ですでに試みられていた）。なお、次の「目録」中、地名の下に丸括弧（ ）で括った片仮名は、わたくしが今日の地名の何にあたるかを示したものである。冒頭の「エウロパ」「イタリア」などのように一見して明らかなものについてはとくに示さなかった。もっともスウェーデン、ノルウェーなどのように、わたくしが書きそえるまでもなかったものが少くないかもしれない。

采覧異言目録⁽²⁴⁾

卷之一

歐羅巴

意大利亞

入爾馬尼亞 (ドイツ)

肥良的亞 (フランドンブルク侯国)

波多里亞

蘇亦齊 (スウェーデン)

没則箇未突 (モスクワ大公国)

西齊里亞

波爾杜瓦爾

瓦辣那達 (グラナダ)

那勿蟻

喞蘭地 (オランダ)

思可齊亞 (スコットランド)

臥兒狼德 (グリーンランド)

卷之二

利未亞

都兒 (トルコ)

麻多 (多本篇) 曷失曷 (一名仙勞冷祖島) (マダガスカル)

邏馬

第那瑪爾加

波羅泥亞 (ポーランド)

福勿泥亞

諾耳勿又亞 (ノルウェー)

沙瓊泥亞

伊斯把你亞

俺大魯西亞

加西蟻

拂郎察

漢义刺亞 (イギリス)

喜百泥亞

曷叭布刺 (ケープタウン)

新井白石と斬新な視野の拡大 (1) (岩崎)

卷之三

亞細亞

亞蟻皮亞

巴爾齊亞 (ペルシヤ)

應帝亞 (西インド)

臥亞

齊狼島

加寧八丹

亞蟻敢

毘牛

滿刺加 (マラッカ)

波耳匿何

食力百私

ホルランリアノウウ

支那

萬里石塘

野作 (北海道)

卷之四

南亞墨利加

伯西兒 (ブラジル)

智里

恩魯謨斯

莫臥兒

麻辣機爾

各正

沙里八丹

鳥里舍

榜葛刺 (東インド)

暹羅 (シヤム)

沙馬大刺 (スマトラ)

瓜哇

馬路古

呂宋 (ルソン島)

阿媽 (媽本馬) 港

日本

鞞

巴大温 (パタゴニア)

字露

アロワカス
 坡巴牙那
 鄮慶蠟
 哇的麻刺 (ガテマラ)

金加西蠟
 ニカラアゲワ
 路革堂

卷之五

北亞墨利加

新伊斯把你亞 (新イスパニアメキシコ)

新瓦刺察 (新グラナダ)

ニウソイデワアルス

ニウノオルトワアルス

新拂郎察 (新フランス)

諾龍伯耳瓦

莫可沙

亞八可爾

亞伯耳耕

大入耳

古巴島

小伊斯把你亞

角利勿爾尼亞

トルコをリビア (アフリカ州、二三ページ*を参照) に入れている点について疑問を感じる向きもあるう。この点について述べたい。『西洋紀聞』ではその項の冒頭に「此国、其地広くして、アフリカ、エウロパ・アジアの地方につらなり、国都は、古のコウスタンチイ (コンスタンティノポリス、いまのイスタンブルのこと)」。其俗、タルタリーア (すなわち韃靼国) にひとしく、勇敢敵すべからず」と書かれている。オスマン・トルコは、白石の時期にはかつての西欧をしのぐ最盛期 (十六世紀) に比しては衰退しはじめているものの、まだ大きな領域を占めて強大を誇っていた。白石はつづけて書く、「兵馬の多き事、一日にして、二百千 [two

hundred thousands) を出す (二十万をいふ)。日を曆かるにおよびては、其衆はかるべからず。エウロパの地方、其侵凌しんりやうに堪たずして、各国各援たすけてこれに備ふといふ。白石はこのようにトルコの領土がアフリカ、ヨーロッパ、アジアに広くわたっていることを認識している。オスマン帝国はつとにアフリカ北岸の広大な地域を領有し、ジブラルタルからスペインにも及んでいたものであり、トルコを主として三大陸のうちのどれに配するかとなれば、このかぎりでは、アフリカに入れるのも領けることであろう。今日ほとんどアジアに退いたといえる共和国トルコについてのわれわれの狭い視点から白石のここでの分類にただちに反対するわけにはいかないだろう。また、韃靼は、蒙古系の一部族タールを指していたが、のち蒙古民族全体の呼称ともなっており、中央アジアの遊牧人であったトルコ族の習俗が韃靼(＝タルタール)に等しいとかれがみているのは妥当であろう。白石は、シドッチやジョセフ(本名ジュセッペ・キアラ、来日後棄教して岡本三右衛門という)の著作(幕府の書庫に納められていた)やブラウの世界図に依拠して、「其大国たる事かくのごとし、万国坤輿図等の諸説、此の国に及ばず〔説き及んでいない〕」とし、マテオ・リッチの万国坤輿図では、トルコをサハラ砂漠の中のごく小さな国として扱っていると批判している。なお、この地域ではイスラムが信奉されていたが、イスラムについての白石の認識は、後述するようにはなはだ乏しい。

③ 人文、とくに歴史について

さきに一言したように、白石は、今日の言葉でいえば、自然地理から人文地理に及ぶ広い領域を視野のうちに収め、後者については、諸国、諸地方の国土、物産、交通、経済、政治、軍事、歴史、風俗、宗教、言語などにかんして、体系的とはいえないが、広く記述している。伊豆公夫がいうように、地理学といっても、「これは、単なる地理書ではなくて、世界知識についての簡単なエンサイクロペヂヤと称することも出来よう。白

石は「日本における世界地理学の源泉」ともいわれる。²⁶⁾

しかも、さすがに白石である。とくに諸国、諸地域の歴史にかんする深い関心がみられる。とくにヨーロッパについての記述が注目される。歴史学者の伊豆公夫が簡潔にこの点について指摘している²⁷⁾ので、それを借用して述べる。まず、白石には、スペイン（イスパニア）、ポルトガルの商船と宣教師が日本に渡来してから「鎖国」にいたるまでの過程についての要約的な記述があり、そのなかでポルトガル商船が「鎖国」後の正保四年（一六四七年）に來日したのを日本側が拒絶した事件と、当時のポルトガルの国状とについての記述が注目される。ドイツにおけるホルトス（？ホルスト（Vorst）か、そ^うで^あれば、＝フェルストFurst）による選挙帝制、スペインの暴政に抗するオランダの独立戦争（十六世紀後半）、水戦に強いイギリスにたいしてつけられた「海賊」という^{あだ}徒名、また、ヘンリー八世のローマの教皇との抗争によるイングランド国教会の誕生などが述べられる。ヨーロッパにおける多数決による選挙王政（ないし共和国）については、次の興味ぶかい叙述がある。「太凡エウロパ地方の諸国、其君を^た立るに、其嗣たるべきもの、すでに定まれるは、論ずるに及ばず。もし嗣いまだ定まらざるは、臣民各其嗣とすべきもの、名をしるして出ず。其しるせし所の数、多きものを以て、其君とす。君、其臣に官を命ずるも、亦これに同じ。臣民薦^スむるもの多き人を、^{アゲ}挙用ふ。君敢^ズてみづから一官を命ずる事も、あたはず」（三七ページ）。オランダでは君を立てず、周の六卿のように各事を掌る官長をたてるとのこと。このように白石は、日本では天皇や将軍が掌手におさめてきた権威・権力について、ヨーロッパの支配者の場合には事情が異なっている点に^{かん}し、客観的な理解に達している。ただし、議會制^{パリアメント}についての記述はない（白石が省いたというよりか、シドッチやオランダ人がおそらく語らなかつたのであろう。クロムウェル革命の歴史的意義についても、その当時のヨーロッパで、とくにオランダなどで、どのように考えられていたかわからない。思うに、二〇世紀からみられるような歴史的認識はおそらくまだ当時確立し

ていないであろう)。

十八世紀に入ってヨーロッパはスペイン継承戦争(一七〇一—一七四一年)で大混乱になった。『西洋紀聞』「中の巻」は、その末尾に「付」としてこの戦争勃発の因からその経過と終結(ユトレヒト条約)までを叙している。伊豆公夫は「この記述も大体正確であり、白石の時代が、西欧羅巴ではいかなる時代にあたっていたかという世界的考察をする場合に白石みずからそれを知っていたことを示すものであって、興味はいよいよ深い」と書いている。²⁸⁾

④ ヨーロッパ諸強国によるアジア、南北アメリカ等の「併取」「侵取」

これも歴史にぞくする問題であるが、独立した項目をたててわたくしはとりあげておきたいと思う。

白石は書く、「エウロパ地方の国々、其地を併せて、新たに国を開きし多し」(五〇ページ)。これは北アメリカについての記述であるが、諸強国がアジアをはじめその他の州でも土地を自分のものとして併せ、新たに国を開いた、ということ、かれは指摘している。国を開いたといっても、自国の植民地としてそこを開発した、ということである。イスパニア、フランス、オランダなどの諸強国が他の諸地域を「併せ取」る、「侵し取」る、また、アフリカの地方がトルコに「属」する、などの白石の表現が、事柄の実体を端的に示している。当然軍事力によるものであり、しかも宗教がからんでいる。

白石は列強のそうした行動をイスパニアを例にしてしばしば述べているが、しかし、強国というものは軍事力で征圧しても「侵略」ということをなかなか認めたがらず、黒を白と言いくるめる。『西洋紀聞』「下の巻」で、善良なはずのシドッチも、白石から「海外の国を併せ得て、国を開きし事」について改めて問われてみると、支配者特有の弁護論を展開する破目^{はめ}になり、次のような無法な返答をしている。メキシコについては、

「ノーワイイスパニア（メキシコ）のごときは、初其国を治むるものもなく、其人こゝかしこむらがり聚りて相争い、弱きは、強きが肉となりて、人の屍を相食ふに至れり〔弱肉強食〕。イスパニヤ人、風のために放されて、こゝに至りて、其衣食の業ををしへ、資財の用を通じて、みちびくにデウスの教を以てす。此方の人、始めて其生養の道を得て、相悦び服し、つゝに其地を納れて、本国の君の治めむ事を望請ひぬ」（六四ページ）。野蠻至極であつた原地人が悦んで服し、土地を献上して統治を頼んだということになる。しかし、一五二一年にアスラカ帝国とその文明を亡ぼしたのは、スペインではなかつたか。フィリピンのルソン島についてはどうか。「ロクソンのごときも、俗皆裸体にして、わづかに樹皮を以て、前後を遮る。其人また禽獸に相遠からず。イスパニア人、ここに至るに及びて、其生養の道を得るのみにあらず、我教（キリスト教）ある事をもしりぬ。国人（原地人）挙りて、本国に内属せむ事を望請ふ。或人諫て、『相去る事万里にして、彼国（ルソンという地域）を治めむ事我、財用もまた給ぐべからず。棄てむにはしかじ』という。本国の君、『海外の人をして、いきてその生を安くて、死して其苦をまぬがれしめんには、我デウスの恩に報ふる所、すくなからじ』といひて、つゝに其請ふ所をゆるされき」（同ページ）。これでは、まるで、スペイン王が、キリスト教の精神を根本に置き、かれ自身の雅量のある人徳によつて統治をひきうけた、ということになる。白石は、このような説明を論評を加えずに紹介しているにとどまる。——かの絶対主義的天皇制のもとの侵略戦争、すなわち十五年戦争時における「八紘一字」、あたかも一つの宇のなかで各民族は皇威の恩寵を受けておのおのその所を得せしめられ安んじている、という思想、さらには、そもそも「大東亜戦争」はアジアの諸民族の西欧植民地主義からの解放という世界的意義を担っていた、という思想をわたくしは想起する。

*絶対主義的天皇制がおこなつた野蠻で暴虐な朝鮮民族抹殺の「皇民化運動」の基礎をなす「八紘一字」の思想については、たとえば、朝鮮総督府の諮問にこたえた時局対策調査会の答申書の次の箇所にもみることができる。「朝鮮統治ノ根

本ハ半島ノ同胞ヲシテ一視同仁ノ聖旨ニ基キ宏大無辺ナル皇沢ニ浴セシメテ名実共ニ完全ナル皇国臣民化ヲ図リ寸毫ノ間隙ナキ内鮮ノ一体ヲ組成シ、……克ク帝国ノ大陸経営ノ兵站基地タルノ使命ヲ全フスルト共ニ進ンデ八紘一宇ノ肇国ノ大精神ヲ顕現スルニ在リ」(朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配』下、青木書店、一九七三年、四九ページ、より借用した)。十五年にわたる侵略戦争が終了してから五十年の今日、このことを深く反省し、わが国は二度とこのようなことをおこなわないことをわれわれは、誓わなければならない。

⑤ 言語

白石は、ヨーロッパ諸国、諸地方の言語はそれぞれ異なっているけれども、大約もとは三つに由来するとして、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語をあげている(ヘブライをあげることにについては意外であるけれども、旧約聖書はヘブライ語で書かれているから、ヨーロッパのキリスト教諸国のうちにその影響が流れこんでいると思っただけであらうか、この問題はしばらく措くとしよう)。注目したいのは、つづく次の文章である。「その中、ラテンに至ては、此方語音しほうに相通ぜずという所なし。されば、諸国の人、これを字じび(ば)ずといふものあらず」(当時の教会での広い使用からこのように白石は思っていたのであろう)。また、シドッチの来日直後、長崎では言葉がよく通じないのでなかなかかれの取調べがうまくゆかず、オランダ商館の補助員アドリアン・ダウがかれをラテン語で訊問したという一幕もあった。「又諸国用ゆる所の字じ〔欧文活字の書体〕、二つあり。一つに、ラテンの字〔今日いうローマン体〕、一つにイタリアの字〔いわゆるイタリック体〕。其ラテンは、漢に楷書の躰あるがごとく、イタリアの字は、漢に草書の躰あるに似たり。」言語学的にとくに重要なのは次の指摘である。「其字母、僅に二十余字、一切の音を貫けり。文省はぶき〔簡約で〕、義広くして、其妙天下に遺音なし(其説〔シドッチの説〕に、『漢の文字万有余、強識の人にあらざしては、暗記すべからず。しかれども、猶なほ声〔音〕ありて、字なきあり。さらばまた多しといへども、尽さざる所あり。徒に其心力を費すのみ』と

いふく」(白石はここで、表意文字を用いず、表音文字で一切の音声を表現する点で言語表現としてのラテン語の優位性に注目している。²⁷⁾ さらに次のようにいう、「其これを習^{まな}ぶの学、ガラアマティカ [Grammatica (ラテン語)] といふは、梵 [サンスクリット語] に悉^{しん}曇^{たん} (其声音を習ぶ学なり)、レートリカ [Rhetorica (ラテン語)、修辞学] といふは、漢に文章あるがとし (其語をつらねて悉ク言を記^しするの学なりといふ也)」。此ノ余、天文・地理、方術・技術 [学問技芸] の小しきに至る迄、悉ク皆ナ学あらずといふ事なしといふ」(三九一四〇ページ)。この最後の文で白石は、ヨーロッパで学問が多くの分科にわかれ、それぞれに専門として教えるものがあることに注目している。すなわち、『西洋紀聞』「下の巻」の、シドッチがかの地で受けた教育について述べた箇所、「彼方の学、其科多し」、「其学科につきて、をのをの師あり」(五六ページ)と書いている。——白石は『東雅』でさらにかれのすぐれた言葉観を展開しているが、本稿はこの問題に立ち入るとまがない。²⁸⁾

⑥ 宗教

白石は、宗教についてシドッチの説くところによれば、天下の宗とする所の教法は次の三つ、キリスト教、異教ないし多神教、および回教とする(シドッチの用語では、それぞれの教徒をクリステヤン、ヘイデンまたはゼンテイラ、マアゴメタンつまり回教徒とする)。ヘイデン・ゼンテイラについては、白石は注して、「此法を問ひしに此宗には、仏を多く立て、それにつかふる也といひて、其教とするところは、つまびらかならず」(七七ページ)としるすにとどまっている。ここで仏といっても、とくに仏教の「仏」を指しているのではなく、他方、シドッチ自身はただ一つの神(デウス)を信ずるために、それとは別の信仰の対象に同じ「神」の名を使わないでいると考えられ、それゆえ、要するにここでは普通にいう神々 (Deot, dei, gods) を立てる

宗教を指すと解され、したがってその宗教は多神教、つまりヘイデン（異教）であろう（オランダ語でこのヘイデン、ゼンテイラの綴りは *heiden, gentile* であり、英語の *heathen, gentile* にあたる）。

次に、ヨーロッパの各地で奉じられているのはキリスト教であり、それには派が分かれており、日本に伝わったのはカトリックスの派（まずイエズス会の天主教）であり、それから出て別の一法を立てるのを、すべて異端とし、ルター、アリウス、カルヴァン、マニ教の類をあげている。オランダではルター派が奉じられているとしてゐる。このように、キリスト教に新旧教の区別・対立があり、新教にルター派、カルヴァン派の区別があること、また、異端としてキリスト教史上で有名なアリウス派があることを、白石は知っていることになる。アリウス派とは、四世紀、ニカイア会議（三二五年）とコンスタンティノポリス会議（三八一年）とで三位一体の信条がアタナシウスらによって確立される過程で、この論争に破れて異端とされた派であり、やがてゲルマン民族のあいだに浸透していった。白石はまたマニ教に言及し、これも異端に数えている。

* マニ教は、ペルシアのマニが三世紀に、ゾロアスター教を基本としてキリスト教的・仏教的要素を加味しこれと融合させて創始した宗教で、キリスト教の異端として起ったものではないが、四世紀になってキリスト教を名乗って、正統的なカトリックにたいし合理的で、知的かつ美的な宗教として、ローマや北アメリカの都市に住む人々の間でかなりの支持をえた。アウグスティヌスが若い頃、マニ教に魅かれ、容易にそれを脱却できなかったのは、周知のところである。³⁰⁾

また、白石は、イスラム（回々教、ルビの「うい」は唐音）については、外国人から耳にしたかぎりでのさまざまな説を「心得えられず」とみている。すっきりと腹に落ちるような説明のえられないものを採用しないというかれの姿勢がみられる。モハメット（ムハンマド）についても何も書いていない。この宗教はアジアで成立したとかれは考えてはいるが、発生地を特定できないでいる。しかし、アフリカ地方の前記トルコでこれが

広く信じられていることは、はっきりと示している。イスラムが大宗教であることをかれはとにかく感じていたらしいが、かれ自身理解をえられないでいる。これは、シドッチやオランダ人のイスラムの内容についての知見の弱さと説明不足におそらく起因しているといえよう。

なお、シドッチは上記三つの宗教のほかに、儒教についても次のように言及している。「又此外、チイナ〔支那〕にして尊信する所のごときは、其学称じてコンフウジヨスといひへこれ儒者自然の学也といふ[＊]、これ此土〔日本〕におゐて、周孔の道といふもの、即此也」(七八ページ)。

＊ Confucius と綴る。Confucianism のこと。英語で孔子のことを Confucius と綴る。

＊ ＊ 白石はここで注して、キリシタンでは、「天地万物、みづから成ることなし、皆これデウス造れる所也」としており、ここから、かれらは、「しかるに儒には、『大極、両儀を生ず。大極すなわち理也』などいふを、『しかはあらず』といふなり」(同ページ)とし、彼我の基本的な見解の対立点がここにあること(すなわち、みづから成るか、神が造ったか)を指摘していることに、わたくしは注目したい。これは、西洋哲学史の内部でも基本的な問題となっているからである。

⑦ キリシタンについて

『西洋紀聞』「下の巻」で白石は、シドッチに、フランシスコ・ザヴィエルやマテオ・リッチのことや、中国でのキリスト教布教の状況などを問い、さらに、わが国にはキリスト教にたいする大禁があることは周知の事であるのに、シドッチの来日したことについて、「今はた何のもとめありて、此所には来りぬらむ、心得られず」と問うている。シドッチはこれに答えて、今代こんだいになってわが教法を禁ぜられた(慶長一八年の家康の禁令を指す)のは、プロテスタントを信仰するオランダ人がカトリックをおとしいるために「我教を以て、人を乱り国を奪うの事也」と告申したためである、とする。なぜかといえば、このような中傷などは、しかし、

深く弁ずるには及ばないことである。ローマ教皇の統治するヴァチカン国は、創立以来、およそ一三八〇年余りになるが、ほんのわずかな土地といえども、人の国を侵し奪ったことがそもそもあったかどうかは、オランダ人に尋ねても、必ず明らかになるはずである。かえてオランダ人が尊崇するルターのごときは、地を侵し国を奪った張本人ではないか。イスパニヤやフランスが海外の地を併せたのは、前述のように、それらの土地に君というものがなく、かれら民衆の信服すべき寄辺よるべがなかったからである。もしそれらの土地がこの日本のように治まっていたならば、その民衆は何を苦んで、自分らの君を万里の外の西欧に求めるであろうか。支那も当初わが教法を禁じたが、すでに何十年も前にその禁を解いている。そういうわけで、「我今こゝに來れるは、此冤えん〔ぬれぎぬ〕を雪すすられて国禁を開かれん事、チイナ・スイヤム〔シヤム〕のごとくならむ事を、望のぞ請ひ申さむがため也」(六五―六六ページ)と一生懸命になって弁じている。

シドッチのいうように、新旧両教の抗争のなかでオランダ人が中傷したという事実もたしかにあったが、イスパニア等々の諸強国による海外諸地方の「併取」「侵取」が強大な軍事力による侵略であることは歴史的事実であり、シドッチのこの弁明は成り立たない。シドッチの来日布教の意志と熱情はかれの確乎とした信仰にもとづくもので、かれ自身には侵略に手を貸す意図が主観的にはなかったことはその通りであろう。しかし、諸強国の侵略は、わが国の近辺、ジャワ、ルソン、台湾（ここは鄭成功が駆逐するまで、四〇年近くオランダ人の手中に帰していた）等々にまでひたひたと寄せているので、日本にもその危険がなかったとはいえない。力関係、諸利益の考慮がここでは働くのである。シドッチ個人の見解とは別に、キリスト教が、とくにシドッチもぞくするイエズス会が、往時、世界の各地でいかに政治・軍事・経済上の侵略と不可分な活動を展開していたかは、拙稿「幕藩体制形成期におけるキリスト教をめぐる思想的激動」(本論集、第59、60号所収)で示したところである。

シドッチのこのような見解にたいし、白石は次のように考える。キリスト教では、デウスを、万物の創造者・主宰者としての大君・大父としており、もしこのように自分の君と父以外に仕えるべき大君・大父が別にあるとし、その尊いことは自分の君と父のとうてい及ぶところではないとすれば、家に二尊、国に二尊があることになるばかりでなく、大君・大父を先とすることによって君をなみし父をなみすることになる。またその教法がそこまで至らなくても「其流弊(世におよぼす弊害)の甚しき、必ず其君を弑し、其父を弑するに至るとも相かへり見る所あるべからず」(六七ページ)とする。白石は『天主教大意』(家宣への上書)のなかでも、キリシタンが日本奪取の謀略をもっているという説はオランダ人の中傷によるものだろうとしながらも、その教法が盛になれば、君をなみし父をなみする反逆の臣子が出てくることは必然であり、キリスト教の盛行は現に明朝が滅亡した三因の一つとされているとして、幕府による禁制をここではその面から肯定している。

白石は、天主教の大略について、すなわち新旧約聖書の内容の梗概、ついで、聖ペテロ教会の設立、教皇のこと、総大司教、枢機卿、司教、司祭、それ以下の教会内での位号、パーデレ(神父)とイルマン(修道士)の区別、旧教・新教の区別と異端、等々について、シドッチに聞くところをしるし、さいごに、キリスト教にたいするかれ自身の次の評語をもって『紀聞』を結んでいる。

一言でいえば、キリシタンにたいして白石は否定的である。「按ずるに、西人(シドッチ)其法を説く所、荒誕淺陋、弁ずるにも足らず」といい切っている。そうはいっても、「其甚しきものごとき(とくにひどい誤り)は、また弁ぜざる事を得べからず」(七八ページ)として、いくつかの論点をあげて駁している。いまその若干をみれば、(1)キリシタンは能造の主としてデウスを立て、「天地万物自ら成る事なし。必ずこれを造れるものあり」というが、もしそうであれば、デウスも何ものが造ったことになるではないか、という。白石は、自然観として万物は成るものだという見地をとっている。(2)人間は原罪を自分では贖えず、デウスが

憐んでイエスとなって贖ったというが、そもそも天戒はデウスが自ら誡めたところであるから、自らその罪を赦せばすむことではないか（イエスとなって贖う必要などないではないか）。それにその誡めたところも、果実を食べるなどという（とるにたらぬ）ことだけであり、誤って食べたところで、人間が自分では贖えないようなことについて、どうしてデウスが三千余年もたつてからわざわざ代わって自ら罪を受けるに及ぶわけがあるのか。(3) ノアと洪水の話にしても、もしデウスが天地や人間・万物を生じ養う無上の君であれば、どうして皆をその教えに従わせることができないで、世界中のほとんどの人を洪水で絶滅させることまでするのか。(4) 天堂地獄や十戒（たとえば他犯たはんすなわち不邪淫）、また、イエスのさまざまな瑞応、磔刑たづけのあとのイエスの蘇生、等々、大約その説くところは、西天浮図（インドの仏陀）の説から出ているのではないか。「今エイズス（イエス）が法をきくに、造像あり、受戒あり、溢頂くわんぢやうあり、誦経ずまきやうあり、念珠あり、天堂地獄・輪廻報応の説ある事、仏氏の言に相似ずといふ事なく、其浅陋の甚しきに至りては、同日の論とはなすべからず」（八一—二ページ）とする。キリスト教がユダヤ教から生れたことを白石は聞いておらず、それはやむをえないとしても、それが仏教の影響によって生まれたとする推定はたしかに正しくない。とはいえ、その前にあげた諸論点はキリストンの教えの不合理な点をついたものであり、かつてキリストン渡来の際から「山口の討論」その他で日本側の仏僧たちから提出された疑問点をひきつぐものである。

『西洋紀聞』は、さいごに、キリストンの禁圧は過剰防禦ではないとする。しかしながら、仏教を借りてキリスト教を抑えるのは、夷を以て夷を治めること、虎を進めて狼を駆る（狼を除かんがためにかえて虎を得る）ことであるとして、批判している、いわく「明季〔明末〕の人、其国の滅びし故を論ぜしに、天主の教法、其一つに居れり。我国嚴に其教を禁ぜられし事、過防にはあらず、幾いくとほくかを知るものにあらざらむには、誰かはこれをよくすべき。たゞその夷を以て夷を治む、時の權宜〔臨機の処置〕には出ぬれども、虎をすゝめて狼を

駆る。またその畏おそれなきにあらざず」(八二ページ)。

* 佐久間象山も『公武一和』で、同様の見地から、かつてわが国でキリシタン禁圧のために仏寺を利用したことがあるが、仏教をもち出すのではなく、日頃から孔孟の教えを大切にすべきことをすすめている。

⑧ 西洋の学問を形而下的のものとみる

以上わたくしは主として『西洋紀聞』によりながら、白石における海外への視野の拡大について述べた。さ
いごに、かれによる「形而上」と「形而下」という知とその領域にかんする区分に注意しておきたい。すなわ
ち、同書「上の巻」には、前記、シドッチが博聞強記で多学の人であると白石が賞めた箇所につづけて、次
ように書かれている。「其教法を説いたくに至いたりては、一言の道にちかき所もあらず。智愚たちまちに地を易かへて、
二人の言を聞くに似たり」と、キリシタンの教えの「愚」にたちかえる。そこから推して、「こゝに知りぬ、
彼方の学〔西洋の学問〕のごときは、たゞ其形と器とに精しき事を。所謂形而下なるもののみを知りて、形而
上なるものはいまだあづかり聞かず。さらば天地のごときも、これを造れるものありといふ事、怪しむにはた
らず」(一九ページ)。

「形而上」「形而下」の語は、周知のように、『易経』繫辞上、「形而上者、謂之道、形而下者、謂之器」か
らくる。ここでは、目に見える形とはならない形以前のもの(形より上のもの)が道であり、それが現象して
目に見える形となっているものが器であるとされる。白石は、そこで、西洋の学問は形と器とに精しいのみで、
形以前の、根本的で奥深いものにかかわるものではない、としたのである(白石は西洋の思想としてキリスト
教のほかにはほとんど知っていない。アリストテレスも、ルクレティウスも、フランソワ・ラブレーも、かれ
には知る余地がないことを念頭におくべきである。キリスト教とその思想文化の歴史についてもごく皮相的に

しか知ることができないでいる。かれはこれらを十分に理解した上で貶しているのではないのである。——白石がこのようにいう歴史的な背景として、ことによると「管家遺誡^{ゆいかい}」にいう「和魂漢才」の言葉が念頭にあったかもしれない(かれはこの遺誡を読んだことがあるのかもしれない)。ただし、そうとしても儒者であり、当代西洋の文物に関心をひろげるかれはもちろん「和魂」にたいするものを「漢才」と考えるはずはなく、それは当然にも、もしいうとすれば、「洋才」であろう。幕末に、同じく西洋の学問技術に触れながら、道真の(あるいは道真に仮託された)この「和魂漢才」の語をモダンに「和魂洋才」という表現にいかえたのは、佐久間象山であった。

* のちにアリストテレスに始まる西洋哲学の「メタ・ピュシカ」(metaphysica)をわが国に導入することになったとき、これに「形而上学」という訳語をあてた。³³⁾

注

(1) 新井白石の生涯と活動については、宮崎道生『新井白石』吉川弘文館、一九八九年、伊豆公夫『新井白石』白揚社、一九三八年、進藤秀幸『三宅観瀾・新井白石』明德出版社、一九八四年、『新井白石』日本の名著15、中央公論社、一九六九年所収、桑原武夫『日本の百科全書家新井白石』、上田万年『新井白石』広文堂、一九七八年、その他、吉野作造『新井白石とヨナン・シローテ』民族教養新書、一九二四年、勝田勝年『新井白石の学問と思想』雄山閣、一九七三年などに負う。

(2) 『大学』に「大学之道、在^レ明^二明德^一。在^レ親^レ民。在^レ止^二於^一至善^一。知^レ止而后有^レ定。定而后能^レ静。静而后能^レ安。安而后能^レ慮。慮而后能^レ得。物有^二本末^一、事有^二終始^一、知^レ所^二先後^一、則近^レ道矣^一、とある(新釈漢文大系2、明治書院、一九六七年、三九ページ)。

(3) 『周易上経』に「乾道變化、各正性命、保全大和、乃利貞」とある。本田濟『易』朝日出版社、一九四六年、八九ページによる。

- (4) 『中江藤樹』日本思想大系29、岩波書店、一九七四年、五一―一二ページ。
- (5) 宮崎道生、前掲書、一二九ページ。
- (6) 井上哲次郎『日本朱子学派之哲学』全、富山房、一九〇五年、九五ページ。
- (7) 宮崎道生、前掲書、一七七ページ。
- (8) 同上書、二八一ページ。
- (9) 桑原武夫、前掲論文、前掲書、七ページ。
- (10) 伊豆公夫、前掲書、二〇四ページ。
- (11) 「人名考」『新井白石全集』一九〇七年、四五―五六ページ。
- (12) 「白石先生手簡、与佐久間洞巖書」『新井白石全集』第五卷、一九〇六年、五六―二二ページ。
- (13) 新井白石の著書『西洋紀聞』『東雅』『鬼神論』『読史余論』からの引用は、『新井白石』日本思想大系35、岩波書店、一九七五年による、その引用箇所については、本文中、丸括弧内で示した。頭注に多くを負うている。また、解説と解題、とくに加藤周一「新井白石の世界」にも負うている。
- (14) 山片蟠桃は『夢ノ代』で白石を批判して次のようにいう、「吾^{われ}新井氏ノ鬼神論ヲヨミテ巻ヲ掩^{おほ}フテ嘆息ス。唯コノ人ノ学流博キヲ勉^こムルノミ。ユヘニ鬼神ノ朦朧タル、其約^{やく}スル(しめくくる) 処ヲ知ラズ。唯涉獵スルノ書ニヲイテハ一モ取捨スル見(見識) ナクシテ、唯信ジニ信ズルノミ。シカルニ新井氏ニヲヒテカクノゴトシ。況ヤ亦新井氏ナラザルモノヲヤ」(『富永仲基・山片蟠桃』日本思想大系43、岩波書店、一九七三年、五一―七ページ)。
- (15) 内海庫一郎・木村太郎・三瀧信邦『統計学』有斐閣、一九六六年、上杉正一郎『マルクス主義と統計』青木書店、一九五一年などを参照。
- (16) 宮崎道生、前掲書、二〇二ページ。
- (17) 伊豆公夫、前掲書、二三七ページ。
- (18) 山口啓二『鎖国と開国』岩波書店、一九九三年、四四―四七ページ。さらに、「当時長崎から入ってきた海外知識のレベルは、そんなに低くなかったということです。新井白石は、密航してきたイタリヤ人のカソリック神父ヨハン・バツチスタ・シドッチを尋問し、その内容を基礎に、『采覧異言』と『西洋紀聞』という二つの名著を著しましたが、これらを読むと、白石が知識もなく尋問したのではないことがよくわかります。白石は、長崎を通じて幕府の文庫に納

められていた、世界知識に関する多くの書籍を読んで、いわば予習した上でシドッチを尋問したのです。それらの知識の一つ一つが、どういう本によっているかは、『西洋紀聞』等を読めば、総て明らかにできます。このような、豊富な世界知識は、すでにこれより以前の、たとえば元禄期に出版されました西川如見の『華夷通商考』にも明らかにみてとれるのです」(同上書、四六―七七ページ)。

(19) 新井白石『采覧異言』、『新井白石全集』第四卷、一九〇六年、八一―三三ページ。

(20) 宮崎道生、前掲書、二二―三二ページ。

(21) 鮎沢信太郎は書く、「江戸時代を通じての碩学である新井白石は歴史学、国語学その他種々の方面において偉大な存在であるが、この人は、またわが国世界地理学上にも見逃すことのできない存在である。白石の世界知識は仏説による『須弥山の説のごとき我国の事に相あづかるべき所にあらず』(『古史通惑問』上、全集第三卷、一九〇六年、三四―三六ページ)となし、専ら西洋流の世界地理知識であった、『日本文学史上における利馬竇の世界地図』日本文学新聞社、一九四一年、二六―二七ページ。

(22) 同上書、一九ページ。

(23) もっとも、これは白石の独創による見方でなく、すでに利馬竇にみられるものである。

(24) 新井白石『采覧異言』前掲書、八一―八二ページ。

(25) 伊豆公夫、前掲書、二四〇―二四一ページ。

(26) 鮎川信太郎、前掲書、二七―二八ページ。

(27) 伊豆公夫、前掲書、二四一―二四二ページ。

(28) 同上書、二四二―二四三ページ。

(29) 『東雅』では、諸国の言語を比べ、表音文字の長所にも留意しながら次のように書いている。「西方諸国のごときは方音韻の学を相尚びて、其文字のごときは尚ぶ所にはあらず。僅に三十余字「?」……筆者)を結びて、天下の音を尽しぬれば、其声音もまたなを多からざる事を得べからず。中土〔中国〕のごときは、其尚ぶ所文字にありて、音韻の学のごときは、西方の長じぬるに及ばず。我東方のごときは、其尚ぶ所言詞の間にありて、文字・音韻等の学は、相尚べる所にあらず。」さらにいう、「凡ソ言詞の間、声音の相成す所にあらずといふものなし。我国古今の言に相通ぜむ、音韻の学によらずして、また他にもとむべしともおもはれず」(一一―一二ページ)。白石の『東音譜』は、西欧の

音韻学の長所を採りいれて書かれたものである。『同文通考』も言語の研究である。

(30) アリウス派について、拙著『ヘレニズム・ローマ期の哲学——西洋古代哲学史(2)——』未来社、一九九五年、二七一—二、三〇六ページを参照。

(31) 『宗教学辞典』東京大学出版会、一九七三年、所収、「マニ教」(加藤武)に負う。

(32) 拙著『ギリシア・ポリス社会の哲学——西洋古代哲学史(1)——』未来社、一九九四年、vi—vii、一七四—一六ページ。

(33) 前掲『ヘレニズム・ローマ期の哲学』三三七—八ページを参照。

(付記)

わたくしは本稿、一九ページの*に「いまわたくしが丸括弧内に書いた漢文は白石自身の原文であるが、これはシドッチがだんだんと『我語』になれて上手になってきたことを意味していると考えている」と書いた。ところで、シドッチと通詞はこの尋問のさい、主としてラテン語で通じたのだろうか。というのは、最近読んだ片桐一男『阿蘭陀通詞今村源右衛門英生』(丸善ライブラリー、一九九五年、一一九—二〇ページ)には、そのように書いてあって驚いたからである。わたくしは『西洋紀聞』と白石自身が漢文で書いた『采覧異言』の「序」とを読んで、この尋問のさい、結局、かれらは日本語をかなり、あるいは主として使ったのであろう、と思っていた。わが方にはオランダ語の通詞が三人おり、オランダ語では、とても通じない。だが、シドッチはカトリックの宣教師であるから、当然ラテン語(会話を含めて)には堪能なはずであり、他方、今村英生は、日本側の通詞のなかでもそのオランダ語は抜群であり、かれなら西欧語の知識を前提にしてラテン語を短期間でも大急ぎで学習すれば、少しは理解しうるであろう。したがって、ラテン語も場合によっては使われたかもしれない。ともあれ、かれらは双方持てる力をフルに活用して理解し合うことに努力したのであろう。じっさい、カトリックの神学や哲学の専門用語などは——かつてキリシタンの広まっていた時期に苦心して作られた日本の訳語はほとんど忘れられていたであろうが——ラテン語の単語に遇れば分かりやすくなるかもしれない(もし羅蘭辞典が日本に来ていて、そこにあるとすれば、好都合であったろう、想像であるが、オランダの商館や教会には羅蘭・蘭羅辞典ぐらいあったかもしれない)。しかし、そうであるにせよ、当日主としてラテン語によって彼我が語り合ったとは、わたくしは思ってもいなかったのである。

もしそうであるなら、『采覧異言』の前述の箇所でも、白石は、あのようには書かず、ラテン語にも言及するなどもう少しの書き方をしたのではないか。

わたくしは、関連する文献としては『西洋紀聞』と『采覧異言』としか読んでおらず、この点を論ずるには知識に乏しいのであるが、ともあれこの方面のことに御専門と思える片桐氏は、尋問のさい使用された言語はラテン語であるとし、さらに白石もラテン語で語りかけたとされているようにみうけられる。すなわち氏によれば、「回を重ねるにしたがい、白石自身も言葉をおぼえて、直接シドッチに問いかけることがあったという。してみると、白石もにわかになラテン語を少々は聞きかじった、ということにもなるうか」と書かれている。わたくしは思うに、単語ぐらいいは白石は少しは口にしたらかもしれない(事前に白石は、幕府の書庫でキリシタン関係の書物の翻訳を読んでいると準備をしたさい、片仮名で書かれたラテン語の名詞なども見ていたかもしれない)。しかし、それまでどの西欧語も学んでいなかった、したがって西欧語の文章構造には通じていなかったと思える白石が、いかに能力の上では語学の天才であったとしても、ラテン語のセンテンスを語ることは無理ではなからうか。わたくしは、旧制高校のとき、若き村川堅太郎教授にラテン語の手ほどきを特別にしていたから、かれこれ五十余年、ラテン語の文章をかなり読んできたが、現代の西欧語やロシア語と比べても、ラテン語はそんなにたやすく分かってしまえるやさしい言葉ではないと痛感している。白石が全くの片言ではなしに、直接シドッチに一定の内容のあることを、たとえ短いにせよセンテンスで語りかけ、また相手の語るところを理解しえたとは、信じがたい。『新井白石の洋学と海外知識』(吉川弘文館、一九七三年)などで白石研究者として名高い宮崎道生氏も、本稿でわたくしがたびたび引用した著作『新井白石』(二一九ページ)で、「シドッチは日本語を学んできていたので、二日目あたりから通訳なしで尋問したという」と書いている。

シドッチは、ヨーロッパを出発する前に三年間日本語を勉強したというし、長崎から江戸までの道中も、かれは通詞たちと旅を共にしているのであるし、かれ自身許されれば日本で布教したいと願っているのだから、その間かなりの努力をして一定の上達をしているだろう、とわたくしは思う。

ついでに、片桐氏の著作についてのわたくしのもう一つの疑問は、『西洋紀聞』「上の巻」によれば、シドッチ尋問のさい、ブラウの世界地図を白石がもち出したのは、第二目目のことであつたと思う。すなわち、第一日目(十一月二日)に、白石が持参した万国図(写本)についてシドッチが、これは日本であるもので精しくない、つまりあまりよくないといつたところ、奉行所に別に古い図があるということで、他日それを持参することを約束した。そして第二日目(同月二五日)

にその古い地図（これがブラウの世界図である）を示したところ、シドッチは「此図、七十余年前に作りし所にて、今は、彼国にも得やすからぬ物也。こゝかしこやぶれし事、惜しむべき事也。修補して後に伝へらるべし」（一五ページ）と語ったという。これは有名な箇所である。しかるに、片桐氏前掲書（二二〇ページ）には、第一日目、すなわち「二月二日」に、「白石がヨハン・ブラウの世界地図を持ち出して尋問したことはよく知られている」と書かれている。わたくしはかえって自分の目を疑う気にもなるのであるが、どういふことであろうか。

以上の二点、わたくしはの寡聞ゆえの理解の間違いであるかもしれない、御教示いただければ幸いである。